



TITLE:

第348回京都外科集談会

AUTHOR(S):

CITATION:

第348回京都外科集談会. 日本外科宝函 1958, 27(5): 1295-1297

ISSUE DATE:

1958-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/206669>

RIGHT:

第348回京都外科集談会

昭和33年6月26日

(1) アルミナクリームによる橋性癲癇の
実験的研究

外科I 森 和夫

アルミナクリーム (Kopeloff, 1942) を猫の半側橋に注入し癲癇焦点を作った場合、生ずる痙攣は多くは (9例中7例) 筋搐搦様の発作であつて大発作の形をとらず、反射性癲癇の傾向を示す。皮質脳波も多くは連波を示し痙攣波をみず、橋の注入部附近よりの深部脳波は spike or sharp wave with slow waves を呈し、深部痙攣波の出現と筋の異常放電はほぼ同期した。之は作られた橋焦点よりの放電が皮質に波及せず focal motor seizure を呈するためと思われ、痙攣は臨床的には、Penfield, Erickson (1941) の tonic mesencephalic seizures と Dawson (1947) の myoclonic seizure の混合形を呈した。又今回の我々の実験は、先年荒木・坂田 (1957) により報告された臨床例に或程度通ずる成績を得たものと思う。

アルミナクリーム注入直後より、皮質、橋共脳波は一過性に低電位速波を示し、猫は大多数が昏睡又は半昏睡となつた。

(2) 後頭蓋窩腫瘍に於ける口角筋電図

外科I 星野 列 松永守雄
今井昭和 黒木照久 森 和夫

(3) 脳浮腫に関する実験的研究

外科I 堺 浩一、石井 昌三

質問

(1): 脳皮質E・E・Gの変化、或は neurological な検査による運動痙攣が edema だけに起因すると結論される理由は? 特に脳表面を露出すると云う非常に大きな物理学的条件の変化が神経細胞に近い部位で長時間続けられる場合、一層神経細胞自身の変化を分離することは難しい。

(2): 細胞の形態学的変化からその機能を類推することは必ずしも容易ではない。

答

(1): slow wave が subcortical-lesion によつて現われると考えられること。

(2): 肉眼的所見、組織学的所見、脳含水量の変化の時間的経過と皮質脳波、運動変化の時間的経過とが一致すること。

(3): exposure によるものとすれば初めから脳波に異常を現わすが、むしろ48~60時間に至つて却つて脳波の異常が高まつてくること。

(4): histologic に Rinde に exposure による破壊、炎症が認められなかつたこと等から edema に関連した変化と考えました。

(4) 中枢神経疾患における筋電図の価値

外科I 岡 宏・松永守雄

質問

石井 昌三

後頭蓋窩の Tumor で主に Grouping Voltage が中頭蓋窩のものでは Fasciculation Voltage が主に出ている様に感じたがこれは前者では知覚麻痺はおこつても痛みはおこることは先ずないに反し、後者では、Numbness with neurologic pain を起し易いという所見と関係があるのではないか。

答

口角以外例えば前頭蓋部で Myoclonus を擱えろという事にするともはや後頭蓋窩腫瘍のみではなくなり、中頭蓋窩疾患でも出て来る。即ち、各筋に対するこの異常波形の波及の仕方は同一の強さをもっていない。又(4)に關しては今後もう少し多くのデータを得た上でないと何も云えぬ。

(5) 十二指腸虫に依る小腸フレグモーネ
の1例

大阪医大外科 磯橋 保、中村和夫

51才の男子、急性虫垂炎の疑で開腹し、腹腔に濁瀝した血性浸出液を認めたが、虫垂には著変なく、廻盲部より約2m口側の小腸壁に約20cmに亘るフレグモーネを認め、所属腸間膜リンパ腺が数コ腫脹し、出血斑も見られた。この部を切除したが、粘膜炎に多数の米粒大の潰瘍と腸壁全般の浮腫を認め、腸壁内に長さ約5mmの白色寄生虫の穿入を認めた。組織学的にも潰瘍附近の粘膜下に数コの十二指腸虫体を認め、その周辺に好酸球及び円形細胞の浸潤、線維素網の析出、浮腫、出血等が著明であつて、アレルギー性炎症と類似の組織像を示した。即ち鉤虫アレルギーによるフレグモーネと考えられる。術後検便によりツビニ鉤虫虫体及び虫卵を証明した。限局性回腸炎といわれるものの中には、かかる症例も含まれることを示唆する貴重な症例と考え、こゝに報告した。

(6) 腐敗性膿胸の1治療例

大阪医大外科 村川 繁雄

赤穂市民病院 伊勢田幸彦 富岡治彦

40才男子、1ヵ月前から高熱と共に、咳嗽及び悪臭ある多量の喀痰を来したが、12日前激しい咳嗽発作の後に、突然呼吸困難と左胸痛を訴え、喀痰量は却つて著明に減少した。自然気胸の診断で、胸腔穿刺を受けたが好転せず当科へ入院した。

栄養不良、体温38.2℃、咳嗽発作あるも喀痰の喀出なく、呼吸は腐卵臭を帯び、胸腔を穿刺して空気及び膿汁を得、その中に多数の桿菌及び連鎖球菌を証明し

た。X線像では、左肺が完全に虚脱して気胸を呈し、下部に鏡面像を認めた。即ち、肺壊疽穿破による腐敗性膿気胸と診断し、直ちに開胸、充分なる排膿を実施術後10日間持続吸引を行った。同時にアイロタイシンを経口的に大量(9600mg)投与し約1ヵ月間で治癒せしめる事が出来た。術後X線検査で原病竈は左下葉と推定された。

かゝる重篤なる症例の治験例は比較的稀れなので、此処に報告した。

7 肛門括約筋を利用せる直腸切断術の経験

大阪医大外科 高山晴夫 石川 登

58才の男子、約1ヵ年の真急後重と粘血便があり、内科的治療により軽快しなかつた直腸ポリポージスに対して、排便機能を維持せんがため、腹仙合併法による肛門括約筋を温存した直腸切断術 Durchzugverfahren nach Whiteheadschen Methode(Kirschner)を行い、術後6ヵ月以降、排便調節が自由に可能となり、満足すべき肛門機能の回復をみた1例を報告した。

本術式は直腸切断後に殆んど死腔を残さず、創の治癒期間が短いと云う利点もあるので、ポリポージス、慢性炎症性腫瘍又は直腸癌にても初期で高位に位置する症例等、適応を選んで実施する限り、甚だ推奨すべき方法と考えるものである。

(8) 珍しい気管憩室の手術経験例

新三菱京都病院 可知守孝 牧 文彦
小松幹雄 由本 伸

55才の男子に於て、右上葉の結核性空洞と診断して開胸したところ、右上部縦隔に存在した気管憩室と見做されるべきもので、同時に気腫性肺嚢胞を合併していた症例を経験した。

切除した憩室は鶏卵大で概ね球状を呈し、内腔には殆んど内容がなく、鉛筆大の交通孔をもつて気管分岐部よりやや上方の右気管側壁に開口していた。病理組織所見では、内腔面は全て顫毛を有する多層円柱上皮で被われ、粘膜下層では慢性炎症像を示し、腺構造、軟骨は見られなかつた。

本症例は稀に見られると云う気管と交通を有する縦隔気管支性嚢腫をも全くは否定出来ない点もあるが、何れにしてもその手術例は本邦文献上には殆んど見られない珍しい症例である。

(9) 腸骨静脈血栓性静脈炎を主訴とせる Seminom の1例

外科I 小沢 和恵

辜丸の腫瘍には特に気付かず、右下肢に浮腫性腫脹をきたし、血栓性静脈炎の診断で治療をうけているうちに、全身のリンパ腺腫脹に気付く、頸部リンパ腺の試験切除標本に依つてゼミノームと診断された。その経過中女性乳房症をきたし、尿のFriedman 反応は強陽性であつた。治療としてナイトロミン、レ線照射を

使用したが、病勢悪化を阻止することが出来ず、発病後2ヵ月遂に鬼籍に入つた。

本症例で特に興味をあたえるのは転移巣がゼミノームの像を呈しながら Friedman 反応陽性、女性乳房症を呈した事であり、この事はもし剖検し得たなら辜丸にはゼミノーム成分の外に絨毛上皮腫の成分が実証し得たかも知れないと述べ、又転移によつて血栓性静脈炎を起し、下肢に浮腫様腫脹をきたすことは、稀でない事を報告した。

(10) 胃肉腫の1例

外科I 土屋涼一 福田治彦

1. 吾々は最近胃平滑筋肉腫の1例を経験したので報告する。

2. 症例44才女子、左季肋部の無痛性腫瘍を主訴とし、入院2ヵ月半前に左季肋部の鶏卵大無痛性腫瘍に気付く。嘔吐血尿、黄疸なし。

3. 腹部透視で胃大彎側にニッシュ様変化を認め、気腎によれば左腎陰影は小。排泄性腎盂造影で左腎盂は造影されない。膀胱鏡検査で左尿管口は閉塞する。

4. 手術所見：腫瘍は腹腔内のもので、胃脾横行結腸で囲まれ、腫瘍の後部で脾尾は扁平となる。胃の1部脾脾尾、左腎を剔出す。術後16日で全治退院す。

5. 病理組織学的所見：胃潰瘍部腫瘍壁共に平滑筋肉腫で腫瘍の原発器官は胃である、脾は脾萎縮像を呈し、腎は結核の疑である。

(11) 乳房美容成形後の再手術2例

外科2 久山健 辻秀哉 佐藤照夫

乳房成形のため異物を注入、埋没して2年目に、局所の異常硬結を来し、再手術を希望して来院した2例を手術し、その手術所見、剔出標本並びに組織学的所見を報告し、異物補填による乳房成形の隘路に論及した。

(12) 直腸肉腫を疑わせた未分化直腸癌の1例

外科II 恒川謙吾 石丸久生

直腸肉腫と極めて類似の臨床所見及び組織所見を呈した未分化直腸癌の1例を報告した。

患者は35才の女子、肛門出血を主訴として入院した。直腸腫瘍は小骨盤腔全体を充し、其のどの部分も柔軟であつた。直腸腔面は広範囲の潰瘍を形成し壊死出血が著明であつた。

この様に肉腫を思わせる局所々見と共に術前2回に亘る試験切片の組織学的所見も亦肉腫を疑わせる組織像を呈した。即ち腫瘍細胞は不統一に散在し、蜂窩状構造或いは腺腔形成は全く認められなかつた。然し其の後、剔出標本について Haematoxylin-Eosin 染色及び塗銀染色を行い、詳細に検討したところ単純癌である事が判明した。

患者は比較的若年者であり、著明な局所の病変と共に組織学的にも高度の悪性像を呈しながら術後の経過は極めて良好で80病日現在何処にも再発、転移の徴候を認めていない。

(13) 脊椎より発生したと思われる骨髄性 細網肉腫の1例について

玉造整形 林 瑞庭

最近私は55才の男子で頑固な腰痛のため歩行困難を来した患者に対し、レ線所見で第3腰椎椎体及び椎弓棘突起の一部に侵蝕破壊像が見られ、ミエログラムでは第2腰椎椎体下縁で沃度油の停留を認めたので、脊椎に発生した悪性腫瘍と判断し、疼痛除去の目的で椎弓切除及び硬膜を圧迫している腫瘍組織を除去し、約3ヵ月間腰痛を消失せしめ得た。手術所見、臨床的所見、組織的所見から脊椎より発生した骨髄性細網肉腫と判定致しました。患者は術後3ヵ月目に肩胛骨烏喙突起、頭蓋顛頂部に転位が認められ、腰痛も徐々に増強して来ているが、現在尚経過観察中である。

(14) 急性化膿性脊椎炎の1例

整形 芳村勝夫 大橋健迪

化膿性脊椎炎は1879年 Lanne-longue の第1例報告以来比較的稀な疾患とされるが診断の困難なことで、時に重篤なる合併症を発すること等により注目さ

れかなりの報告例がある。我々も最近腰椎の化膿性脊椎炎の1例を経験したので報告した。患者は15才の男子で激しい腰痛と40°Cの高熱を主訴として入院、検査の結果腰椎附近に膿瘍の存在が疑われたので切開を加え、第3腰椎棘突起より椎弓に及ぶ骨の壊死化と周囲膿瘍を見だし罹患椎弓切除ならびに排膿を行なった。膿汁よりはブドウ状球菌が証明され、之による急性化膿性脊椎炎なることが判明した。術後、発熱漸次下降すると共に腰痛も消失し、全治退院した。

(15) マンソン孤虫寄生による膝関節拘縮 の1例

整形 佐藤正泰 田中三郎

17才、男学生、出生地は神戸であるが6才の時台湾に渡り、今日迄台南に居住し、今回治療の目的で来日したもので、約6年前から誘因と思われるものなく歩行時左膝関節部に疼痛を来し、跛行する様になった。手術的に左腸脛靱帯の附着部に近い部より、長さ1.2cm、幅2.0mmの *Sparganum mansonii* 3条を得たが、感染経路を正確に究明することは不可能であった。